

ら、源泉資料に遡りつつ均整の取れた説得力ある議論を展開している点で、読者を魅了するものである。本書においては、歴史的研究と、精神史的解釈および哲学的・神学的思索とが、思想史的研究にとって模範となるような仕方で統合されている。しかし本書を通読した読者は、フランシスコとボナヴェントゥラに至る問題史的・概念史的系譜を、例えば十二・十三世紀における人間像や人格理解に即しながら、より詳細に辿るような記述を望み、あるいはボナヴェントゥラにおける歴史の理念が中世末期を通して近世の進歩理念にどのように繋がっていくのかをさらに踏み込んで知りたいと思うかもしれない。もとよりこのような課題は、多くの情報を盛り込みながら、主題に即した明晰な議論を味読する喜びを読者に感得させる本書にとっても、すでにその範囲を超えているということになるだろう。

---

谷 隆一郎 著

『東方教父における超越と自己——ニュッサのグレゴリオスを中心として』

創文社、2000年、336頁

山 村 敬

本書は『アウグスティヌスの哲学—神の似像の研究—』（創文社、1994）に続く、その姉妹編とも言うべきものである。著者は、アウグスティヌスとニュッサのグレゴリオスの研究を通じて、この東西二人の教父の伝統が、中心的位相に関しては、同根源的なものとして深く呼应し合っていると感じたという。アウグスティヌス的西方と東方とに共通な一つの教父像の提起である。しかし、東西に共通というその「中心的位相」の実質的内容は、アウグスティヌスの哲学なのである。殊に評者は東方教会に属するので素直に答えるのが難しい重い問題の感じである。

ニュッサのグレゴリオス解釈には、依拠する著作群によって、解釈が分かれるようなところがある。視点によって解釈が大きく動くのである。先頃土井健司著『神認識とエベクタシス』（創文社、1998）が出た。E. ミューレンベルグを意識した設問である。ミューレンベルグはダニエルーらの神秘主義的グレゴリオス解釈に対して、哲学

的無限性をグレゴリオスの神概念として立てる（1965年）、それが神秘主義的解釈のアナログアに道を塞ぐ。土井氏はそうした理性論的問題設定に対して、人格の関係視点を立てて問題を見直す。本書はそれにしても思い切った問題提起である。そこで、一応評者なりに全体を辿った上で思うところを述べたい。（本書の特徴の一つ、強い「修道」的動機の関連はにおいて、「教理」理解の問題を中心に。）

本書が依拠する『モーセの生涯』と『雅歌講話』とは、コンスタンティノポリス公会議をめぐる論争的活動の後、落ち着いた修道的生活の中で書かれている。

本書の目的は、教父の愛智（＝哲学）の根本的な意味と構造とを、「教理的枠組を超えて」明らかにすることである。愛智の道行きにおいてこそ、「神の似像」たるべき人間の本然の、「人間であるかぎりの」すがたが現に「成立」（ヘブライ的存在の動的な意味で）してくる。それは人間の「自己探究が神探究」であり（アウグスティヌスの）、両者がそこで出会ってくるような内奥の位相でのことであると言う。

（第1部）は予備の意味をもち、愛智の基本的な構造原理を、アレクサンドリアのクレメンスの著作を「反省」することによって取り出す。まず、愛智は信の構造をもつ。信とは、神性の働きに触れてそれに自由に対応し（プロアイレシス）、それを何ほどか宿した魂のかたち（ある先取的な知）である。そのようなものとして信は愛智の探究の端緒をなし、また確実性の基礎でもある。信とは神性に貫かれた一つの確実性でありつつ、魂・自己の全体が一つの志向と探究へと促された姿である。その他、それは常に己を超えてゆく動性であること。信を成立させた根拠・原因は、同時にまた、信がいわば自己還帰的に志向し愛する当の終極・目的でもあること（再帰的自己還帰的構造）。この構造の両極としての究極の根拠＝目的なる神はそれ自身としては直視し得ず、完全な知として所有することも出来ない。その限り神性の知は「出会いの経験」つまり「信というかたち」の内側から、その成立根拠を覚え知り見出すかのごとくに語り出すほかないこと、など。これら愛智の構造原理を『ストローマティス』ほかの著作から「反省」の力で読み取るのである。アウグスティヌスがほぼ同じ内容を自らの内面から取り出すのに比べて、はるかに錯綜した動機関連の中から一つの可能性として読み取られるのではないか。

（第2部）ニュッサのグレゴリオスでは『雅歌講話』と『モーセの生涯』とによって愛智の全体像を語る。信は神性を何らか宿した「先取的な把握」であるほかクレメンズとはほぼ並行であるが、ただ、解釈用語として、脱自的志向を言うエベクタシスの

語が加わることが新しく、内容が深められる。

前著では最後の一節として付加されていた「神性の全一的交わり」の主題が本書では「肉体・質料の復権と他者」の主題と共に個々の魂のエベクタシス脱自的志向・超出（超越的にして無限なる神性を根拠・原因＝終局・目的としてもつ）と並ぶ一つの章として立てられ、バランスがよくなり、その全体をエベクタシス視点が貫いて深みを増している。そして全体として第8章「内なる根拠・キリストの発見」への道付けにもなっている。

（第2部第8章）は「いわば愛智としてのキリストの名の研究」である。すなわち、受肉や神人性の教理を、魂の「自己探究＝神探究」の原則に立ち、脱自的志向とその「根拠＝目的」という信の構造で捉えることである。この愛智の構造から、超越的神性に与かる人間存在の理解が帰結し、受肉や神人性の教理はその根拠を示すものと考えられる。そこで著者は、これらの教理は「人間とは何であり、またあり得るか」という問を生きた使徒・教父たちの生の中で自然的に見出されていったので、特定の「神学」や「教理」の問題ではない、とする。こうして、教理の成立を使徒的経験の場に探る本章の試みになる。

キリストについて語られる受肉や神人性の表現の成立について、人間的経験の側から言えば、神性の現存する働きに貫かれた使徒的魂が、その働きに出会って、その働きの真の主体、「根拠＝目的」なるものについての洞察が為され、キリストを主語とした言明が語り出される、と考えられる。

超越的な神性は、その超越的な神性への愛というかたちで、この世界、この身に顕現し受肉してくる。神は神への愛、すなわち勝義の人間として顕現する、あるいは、存在（＝神の名）の現成のかたちが人間だと言ってもよい。キリスト論というものは一歩踏み込んで反省し直されるとき、ほかならぬわれわれ自身の最も本来的なかたちの成立に、普遍的に関与してくるのである。

教理表現の極みは神人二性の結合様式を「ヒュポスタシス的」と語るカルケドン信条の定式である。これが愛智からどう把握されるか。その結合においてキリストの二性は「融合せず、変化せず、分割せず、分離せず」と語る徹底的否定は、知り得ざるものを「知り得ざるものとして知る」意味の否定で、不在とは逆に確実性の漲った魂のかたち、すなわち魂が無限なる神性に向けて自己を超え出てゆく信の構造、エベクタシスの姿を示す。

「キリストにおける神性と人性との結合」などについての教理表現は、客観知に属するものでなく、主体的信の経験の中から、その経験の根拠を示すものとして語り出されたものであろう。そこに、神の子キリストを主語とする語り口が生じてくる。

「ヒュポスタシスの結合」ばかりでなく、教理を語る文章はすべて「われわれは…信じ、告白する」という信の文脈に置かれている。客観知の領域でなく、無限性の場である。

「ヒュポスタシス・キリスト」の成立と意味について。ヒュポスタシスの結合は、人性の、神性と結合し、攝取されることに無限に開かれているという特性に添うて言われる時、「神・存在の現成」の、また「人間の成立」の意味になる。一口に、ヒュポスタシス・キリストの成立は、人間という形での「存在の現成」を意味する。この理解は、教父の伝統が、ヘブライ的伝統のダイナミズムを継承して、本性と存在のギリシア的把握を突破していった働きの完成、成就を示している、と。

受肉や神人性の教理が信の構造の主体的内面性として語られた最後に、「ヒュポスタシス・キリストの成立」が古典ギリシアの突破・克服の営みの完成、成就の意味をもつことが言われている。それは言葉を対象化的方位（宣教的）に、いわば開いたことになる。ここで、ヒュポスタシスの結合において、神性と人性とは相互に「融合せず、変化せず、…」とある語のいわば言葉としての性格を改めて考えてみよう。本書では、すべてを「信というかたちの内側」から見て、教理を語る文脈は総じて客観知の領域になく、それに先んずる無限性の場にあるものとして専ら語られる。著者は、自己探究が神探究というアウグスティヌスの信の内面性の視点をどこまでも貫きたいのである。しかし考えてみると、これらの語は異端的把握を防いで、それに対して、言っているのであるから、そのかぎり、対象的客体知の側面を考えるべきではないか。つまり、対異端の眼差しがそこにはあるので、結局ここは信と客体知との領域が接する境界面であり、出会う場なのではないか。

そしてその対異端論争の場はまた「文化の問題」の成立する場なのではないか。ニュッサのグレゴリオスは『大教理問答』序文で、「対話においては、それぞれの先理解（ヒュポレープシス）を見て、相手の前提から出発し、真理が双方から同意されたところから従って開かれてくるようにしなければならない」と言っている。

そこで、東方教会に属する評者は、本書の内容をグレゴリオスの思想にはさまざま

な位相のあり得るうち、「中心的位相」として受け取るにしても、教理形成の過程（対異端論争）を同じ比重で考え得る限りにおいて、と言いたい。著者は、「異端との厳しくも豊かな拮抗と超克の歴史」を認める面をもちながら（p.258）、その展開の重大な一局面「神のウシアとエネルゲイアの区別」を、愛智の道行きの立場から見れば意味が薄いという形で、その意義を否定している（p.111）。東方では、上のグレゴリオスの言葉が示すように、神学の形は文化の形と深く結びついていて、内的必然性をもって展開するのである。その点アウグスティヌスの伝統の西方の事情はどうであろう。信仰、神学、文化の関係が定まらないことによって、中世に神学と哲学が並立し、それが著者が繰り返し批判する西欧近代の学的領域分化の原因とは考えられないであろうか。

以上教理視点からの論評。なお東方では魂の「自己探究」でなく啓示の「所与」から出発するのが一般であること、また神の似像（eikōn）の意味は一義的でなく、肖（homoīōma）と区別されることなどとの折り合いが問われ得る。

---

### 中川 純男 著『存在と知——アウグスティヌス研究』

創文社，2000年，314頁

片 柳 栄 一

本書を貫いている問題意識、そしてこの書をユニークなものにしている著者の研究の方法は、「アウグスティヌス自身は何の説明もしていない問題、あるいはわれわれに納得できるような説明を与えていない問題」（vii 頁）、そのようなアウグスティヌスの思考の隠れた前提とでもいえる問題を抉り出し、思想史的背景にまで遡って考え直そうとすることである。こうした問題は、著者の長年のアウグスティヌス研究の中から生み出されてきた「問い」に由来するものであり、その「答え」も、手軽な要約や最新の研究の紹介で到底済むはずもなく、この著書の背後に、研究者自身の、手探りの、いわば指に血が滲むような探求の積み重ねが推測される。それだけに、読む側にも、関心と理解の共通地平を得るための忍耐が当然要求される。そしてそれは、豊